末黒野

すぐろの

11月号（通巻855号）

末黒野　平成二十九年十一月五日発行　第七十二巻第十一号（通巻八五五号）

金秋

雌雄決すべしわたつみの雲の峰
牧水の酔ふための浜秋に入る
朝顔の深き紺わが恋ふる色
秋の蟬いのちつくづく惜しといふ
ビルに触れてよりの加速や秋落暉
やをら立つ西瓜の種を大工吐き
秋めくや河原の石の白極め
目立たずに且つ真つ直ぐに男郎花
流星や眠らぬ基地の灯の溢れ
採血の痕消え残る秋思かな
締切の迫る原稿夜のちちろ
虫の夜や水たつぷりと水仕妻

松本三千夫

爽やか

草原をならし吹く風秋めきぬ
どちらからともなき握手爽やかに
港まで船が船曳く秋夕焼
過ぎ去ればすべては風や秋の暮
乗馬の子足ぶらぶらと牧秋暑
先を行く友の健脚花野道
赤き橋渡りて行くや盆踊
隧道の暗きを出でて葛の花
芦の湖の真青な湖や鴨来たる
時計台の鐘鳴り渡る花野道
秋の日の天空にあり岩木山
後より迫る夕闇鵙猛る

黒滝志麻子
（副主宰）

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

夏旺ん

石黒興平

木洩れ日の森林浴や梅雨晴間
久々の佳き日に適ひ大夕焼
緑蔭を出でず句帳の五六人
吹かれゐて一すぢ光るくもの糸
出稽古の踊りの師匠薄衣
評判の厚焼卵暑気払ひ
てらてらの鼻寄する牛夏旺ん
梅雨晴や鉛筆削る句座支度
蟬時雨大僧堂の揺らぐかに
病院の窓まどに人神輿ゆく

盆

田中臥石

食卓に地産のメロン匂ひけり
白陀地蔵如何に出水の雄物川
原爆の忌や膨涛と水走る
行合の夕雲流る原爆忌
匂ひ袋と思ふ和服の女過ぎ
送り火の提灯揺るる墓の径
誘蛾灯まだ点りをり盆四日
初秋の日射しや厚きマタイ伝
林への道や稲田の風匂ふ
日翳の林へ入りぬ茸狩

大楠

森清堯

絵を描くやう園丁の駆る草刈機
湯の宿のソファーに沈み夕河鹿
これ以上無理はするなと蝸牛
人の世のまさかの多し日雷
引率の旗のみ動き大夏野
山百合や風呼び雲を引き寄せて
白南風や早瀬に挑む魚の影
放牛の耳の黄の札草いきれ
大楠の朝の蔭濃し広島忌
秀を揃へ株をそろへて稲の花

滴り

森清信子

ほとばしる渓の水音花胡桃
黙祷の固き拳や沖縄忌
滴りや山のいのちの音たてて
立ちこめて一山呑めり夏の霧
ハーレーに跨る乙女雲の峰
日の匂ひかもす夕立や奈良井宿
濁流のたぎる岩場や青胡桃
懸谷や妖精架くる虹の橋
水が水押して岩越ゆ台風過
稚抱く広き胸板大花野

一太刀

安斎久英

河骨やうしろに人の立つ気配
しばらくを雲の造形大西日
麦秋や島にすつくと塔の先
只ならぬ夢でありしよ明易き
瀬に落とす宿の捨て湯や苔の花
岩清水掬ふや遠嶺仰ぎつつ
蒲の穂を仰ぐ憂ひの眼かな
花韮にやさしき風の生まれけり
蟻地獄手に遊ばすやこそばゆく
太刀魚の一太刀翳し釣られけり

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

朝凪　吉田きみえ

雷の大音響や夜半の雨
朝凪の磯や鷗の羽づくろひ
一つ星光を残し、蟬しぐれ
夏蝶の発ちぬ夕日の川原石
筒鳥の餌や渓の水光り
青葉木菟鳴いて星降る母郷かな
達者かと一筆従姉妹よりの桃

黒揚羽　今村千年

更衣妻の好みに抗はず
風と来て批来たるごと黒揚羽
日盛りに飴切る音や大師道
夕汽笛みなとみらいは海霧のなか
木屋町のそぞろ歩きや月涼し
清水へ三年坂や夕月夜
阿夫利嶺へたな引く雲や秋めきて

秋されて　岡田史女

蛇行せる川を眼下や蟬時雨
結葉や丹沢山系はるかにし
吹き抜くる風や涼しき古墳群
苔茂る関守石を結界に
蔀戸にががんぼ脚を置きざりに
秋されて葦へ落ちゆく水の音
山の日の雨葦原をざはめかす

雲の峰　岡野里子

初蟬や濠に潮さす昼下がり
働かぬからくり時計蟬時雨
里山の雲湧く早さ群青忌
山裾の湖万緑の海めきて
里山の大池小池行々子
一穢なき海の白帆や雲の峰
晩涼や市を離れて市の声

悪戯　小田嶋野笛

海底のやうなる街よ大夕立
虹消えて空は大人の色となる
雨好きの雷好きや淋しがり
悪戯の露見を恐れ蟹穴へ
暑き日の空ひとり占めシーツ干す
夢あまた捨て来て七十五の昼寝
抽斗に雲形定規士用干

万緑　加藤静江

万緑や多摩川古墳黙深き
初蟬や古墳の森の静けさを
多摩川の青き輝き雲の峰
立葵海を背の無人駅
十薬の思ひのままや風致地区
木洩日や日の斑と紛ふ揚羽蝶
雨あとの香りを放つ茅の輪かな

爪楊枝　菅野日…

意識なき友の手にぎり遠き雷
夏風邪の睡魔の撰ふ詩心かな
手作りの皿の武骨や冷奴
爪楊枝ほどの蟷螂鎌かざし
四阿の視野をかすめぬ黄鶺鴒
炎天や音なく廻る観覧車
スーパーの駐輪場や日の盛り

青炎集

松本三千夫選

横浜　布施由岐子

カフェバーへ心揺らめく氷旗
射干のあふぎを覆ふ草の丈
天佑の木蔭のベンチ汗滂沱
足枷の靴ぬぎ素足生き返る
心臓が泳ぐやうなり水海月
石垣を石火の光青蜥蜴

横浜　橋場美篤

レストランへ磴百段や夏の富士
沖を行く巨船のかなた雲の峰
大歌舞伎宙乗りの子の眼のさやか
骨董品並ぶ茶房やソーダ水
結界にたたむ日傘や古墳塚
風抜くるビーチパラソル児の熟寝

大網白里　岡井マスミ

荒れ庭に紛るる一花紅蜀葵
林泉に風の道あり夏館
戦争展見たる夕べの水を打つ
あかときの鉄路のひびき今朝の秋
鶴一羽折り八月の祈りとす
スーパーへ一枚羽織る盆の明け

横浜　原和三

百日紅擬宝珠眩しき地蔵堂
ぼんぼりの灯の涼しさや実朝祭
禅寺の茶屋で甘酒谷戸の風
卍池へそそぐ水音岩煙草
渓谷の流れきはやか木下闇
今少し鼻梁の欲しやサングラス

横浜　饗庭恵子

匂ひにも重さありけり栗の花
耳打ちをさらりとさらひ青嵐
とんぼうや小銭の光る道祖神
大いなる富士の夕焼旅の果て
水色に昏れてゆくなり河鹿笛
黒揚羽空に結界あるごとく

横浜　外山生子

十薬を引きけり長き根の力
空蟬の葉裏に縋る足強し
スーパーに並ぶ八つ切西瓜かな
炎帝の飲み込みにけり物の影
風の道さがせど見えぬ極暑かな
百日紅咲くや朝夕掃く日課

横浜　赤塚篤子

佐渡おけさ聞こゆる船や梅雨晴間
束の間の日差し棚田に朱鷺一羽
朝顔や行き所なき蔓踊り
指先に触れて弾けて鳳仙花
原爆忌鶴折る手元老いにけり
初物は長生きのもと栗御飯

横浜　小山直子

蟬生まる天使のやうな翅つけて
谺する太古の調べ滝の音
まだ残る石のぬくみや魂送り
もの忘れ常のことなり茗荷汁
秋立つや静かに降ろす心の帆
寝る子等の息を正して秋風鈴

横浜　前原マチ

木苺を含みて里を近うせり
松籟や沖のヨットに目を凝らし
蹲踞の日の斑掬ひぬ百日紅
木の橋の池の睡蓮空真青
太穂句碑囲む蟬穴蟬しぐれ
蟬しぐれ厩舎の屋根の大時計

横浜　山本茂子

三日三夜の予報確め梅を干す
核廃絶へ思ひの新た原爆忌
いち早く秋へ誘ふ野草かな
俯きて雨に咲き初む秋海棠
束ねてもどこか淋しや草の花
水引草ゆれて華やぐ杣の道

耕土集

黒滝志麻子選

素裸の一歳今し自由人　目黒　五十嵐貴子
病癒へ青き夏野をこころざす
甘酒の傾ぎ積まるる店の籠
夏痩と言ひて術後を苦笑ひ
苛立ちものせ冬瓜に刃を入るる

メトロ出て祭の人となりにけり　横浜　大塚かずよ
雲見ゆる窓に顔向け籠枕
サーブ打つ黄色き声や雲の峰
幼子の覗く宇宙やラムネ玉
新涼やベイブリッジを走り抜け

海望む新緑の道走り出す　神奈川　太田　利明
麦の秋歩幅を妻にあはせけり
旅の夢鞄に詰めて夏休み
初蟬の声いづこなる雨の後
風騒ぐ鬼灯市の下駄の音

川船の白シャツ干せる遡江かな　平塚　尾崎千代一
夏休み足蹴しあへる子の寝相
問診の女医に頷き涼新た
法事終へ安堵の母やつくつくし
仏彫る流木選び野分跡

五年越しの仙人掌の花紅七つ　新潟　五味　紘子
見はるかす越後の青田朝の雨
角帯の男の子腰高踊りの輪
白百合の祈りの様に首垂る
胸に秘め言はぬまことや月見草

得意気に桑の実一つ銜みけり　横浜　中野　大樹
梅雨しとど夜汽車の窓に牛舎の灯
潮風や干し蛸揺るる海の宿
湯の宿や瀬音に混じる夕河鹿
黒部ダム放流見する大暑かな

初とんぼ

小川玉泉
（名誉顧問）

梅雨晴の菜園蝶の三つ巴

尾を丸め池面に触るる初とんぼ

梅雨明けや雲の狭間の夕茜

隣への行き来は自由きりぎりす

みんみんの伴奏めきぬ朝シャワー

雨あとの日を惜しむかに油蟬

雑記帳　4

この夏の異常気象には、人智の弱さと宇宙の広さに頭を垂れるしかない毎日である。蟬の声のみが例年より活気を帯びているように思う。俳句作りの楽しさを持ち続けたい。